

ハウス・トンネル春作這栽培用、高糖度で貯蔵・輸送性の高い緑肉種

ホームメロン デリシイ

特性と栽培方法



第1図 標準作型

地域	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9
九州	○	○	△	□	—	—	■			
	○		△	□	—	—	■			
関東	○		△	□	—	—	■			
	○		△	□	—	—	■			
東北	○			△	□	—	—	■		
	○			△	□	—	—	■		

○は種 △定植 □着果 ■収穫

公益財団法人 園芸植物育種研究所

〒270-2221 千葉県松戸市紙敷 2-5-1 (2012年10月1日法人名変更)

ホームメロン デリシイ

〈特性と栽培方法〉

育成経過

コサック、アムスに次ぐ品種としてより栽培適応性が広く、糖度、肉質の安定したネットメロンを目標にして育成した品種で、昭和55年に命名発表した。その後「デリシイL」「デリシイS」の二系統に品種を分化させ栽培適応性を広めている。

育種素材としては、アールスメロッキーフォードの固定系、オーゲン(オランダより導入)、台湾導入系等を使用して育成した。

品種特性

- 果形はやや腰高、果重は1.2~1.5kg、果皮は濃緑色で細かいネットが出る。
- 果肉は厚く緑色で、胎座部は白色で燈黄色にはならない。
- 肉質は緻密で収穫時には硬いが徐々に軟化し、収穫後5~10日の間が食べ頃で適食期間が長い。
- 発酵性はほとんどなく、果肉がしまっているため現存のネット系品種の中では最も貯蔵輸送性があると思われ出荷調整をすることができる。
- 標準糖度(Brix) 15~16%。
- 成熟期間 { 九州~関東 55~60日。
 { 東北・北海道 50日前後。
- 雌花の着生は安定し、低温着果性も高いので、蜜蜂交配で安定した着果が得られる。
- ウドンコ病抵抗性。

〔 L、S系の差 Lは大果、Sは小果を表わし、この差は同一条件の栽培で、一果200~300gである。標準的な春作ではデリシイLを使うが、遅まきの春作や秋作等、高温期の栽培ではデリシイSの方が果の大きさも適当で糖度が高く、ネットの発現も安定し果肉の厚いしまった果実となる。〕

栽培の要点

■作型と栽培様式 関東以西ではハウス、東北、北海道ではハウスまたはトンネル(被覆資材270cm以上)の這栽培で、子づる2本仕立、1つる2果、株4果穫り、作型は第1図を基本とする。前進栽培には不向で、遅まきの春作、秋作立栽培(1つる1果穫り)にはデリシイSが適する。

■標準施肥量(成分量kg/10a)

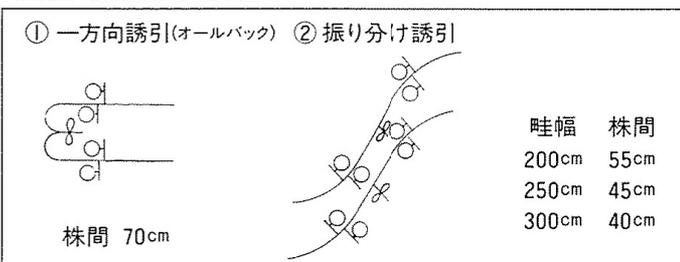
N	10~12 kg
P	20~25 kg
K	12~15 kg
Ca	70~100kg
完堆堆肥	2~3 t

- 誘引方法と株間 第2図を基本とする。
- 定植と温度条件 高畦マルチ栽培とし、定植時の温度条件は、地温は地下15cmで18℃以上(最低15℃以上)最低気温10℃以上を維持することが必要である。
- 着果節位と整枝 第3図を基本とする。
- 着果方法 蜜蜂交配を原則とし、蜜蜂が使えない場合は筆交配、人工交配とし、ホルモン着果はしない。
- 定植後の温度管理 最高気温は全生育期間を通じ30℃前後とし、最低気温は定植から交配期前までは12~15℃、

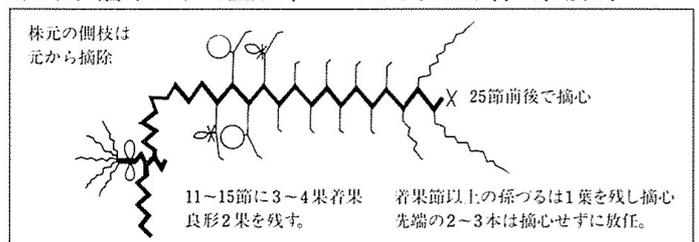
交配期から果実の肥大期(開花から約40日間)は15~18℃を目標に管理する。

- 灌水 鶏卵大からネット発生前までが最も灌水の必要な時期で、その後肥大の終了する開花後40日目前後までは適度な灌水が必要である。交配期以前の多灌水はつるぼけの原因に、収穫前の多灌水は裂果の原因になりやすいので注意する。ネットの発生は開花後18~20日目くらいに始まり、40日目くらいでほぼ完了する。
- 収穫、出荷 開花後日数、果皮色の変化、結果枝の葉の褐変等が収穫期の目安となるが、最終的にはヘタが緑色から白黄色に変わり、離層が発現し始めた時が収穫適期である。収穫時の肉質は硬く、軟化して食べ頃となるまで数日を要するので、出荷先までの輸送時間を考え、追熟をしてから出荷する。食べ頃は果実の側面から押してやや軟くなった時で、その後数日間が食べ頃となる。
- 病害虫対策 ウドンコ病には抵抗性で防除の必要はない。その他の病害虫には通常の防除が必要である。つる割病(フザリウム)に対しては、つる割病抵抗性の園研2号(共台)を台木とする。

第2図 誘引方法と株間



第3図 着果節位と整枝(子づる2本仕立、株4果穫り)



- 株元の数葉は摘除し通風、日当たりを良くする。
- 生育後半に伸びてくる枝で、特に強いものは先を止める程度とし、元から摘除するような強整枝はしない。
- 自然着果した果はその都度摘果する。